

キッズデザイン協議会との意見交換	
開催日時	2018年1月24日(水) 13:30 ~ 15:00
開催場所	特定非営利活動法人 キッズデザイン協議会事務所
参加者	キッズデザイン協議会：杉山（事務局長）・船田（認証部長） NACS：田近・浅見・森口
書記	森口

杉山智康：キッズデザイン協議会 事務局長

船田裕也：キッズデザイン協議会 認証部長

## 1. 標準化を考える会の趣旨とこれまでの研究の紹介

### ①資料「標準化による安全な生活を求めて～助けや危険を知らせる音のデザイン・標準化～」の説明

（標準化を考える会の研究テーマ）

“SOS”と分る音や、そして『助けなくては』と行動を促すような音ができればいいと考える。

#### ◇【産業総合研究所 佐藤洋氏との意見交換】（2016年2月）

「助けや危険を求める音の標準化は、コミュニティーを巻き込むといい」などのアドバイスがあり、防犯と救済の音は両立するかについても議論した。

Q6：耳に心地よい綺麗な音でも注意喚起できるか。

A6：心地良い音でも注意喚起はできる。ソフトで緊迫感がない音でも、行動を起こすようにすることはできる。地震の時は長時間音が鳴っていなければいけないが、防犯の時は長時間では意味がない。目的、認識、行動がセットになっている。一次的予防効果としては犯人が逃げ出すような鋭い音がいいし、助けにくる人には音の伝え方はやさしい方がいいが、防犯と救助につながる音について皆が共通の認識を持つことで、2つの目的を融合させることはできる。

#### ◇【助けや危険を知らせる音のセミナー開催】（2016年10月）

ワークショップ 環境音の中で防犯ブザー3種類の聞き比べ(環境音設定あり)

環境音を街中の雑踏と設定し、先に実施した聞き比べと同様の順番で音を鳴らし、変化や劣化内容を記述式にて評価を行い、以下の意見等があった。

- ・雑踏の中ではBはクラクションの音に似ているので分からなくなった。
- ・信号の音や鳥の鳴き声に聞こえ、防犯の音との区別が難しい。
- ・SOSが感じられない。雑踏の中では聞こえない。

## セミナーアンケート結果 標準化の必要性を指摘する意見

- ・講演を聞いてメロディーも付けた方がいいと思った。先ず、標準化すると決めて体制を整えてから、関係者が集まり音の専門家をまじえ、どんな音がいいか検討すればいいと思う。
- ・音の標準化は大切なことだと改めて思った。どんな音でも、音の発するメッセージが理解できなければ伝わらない。標準化と一般化が大切である。

### 考察：助けや危険を知らせる音の標準化の重要性

切迫性の高い社会課題として地震・津波等、災害対策や、子どもの安全、高齢者の見守り、障がい者等へのサポートなどが挙げられる。それらの解決に向けて、助けや危険を知らせる音の標準化が貢献できると考える。

また、聴覚に障がいのある人達には、振動や色や光の点滅を加えることにより音の機能を補完できると思われる。助けや危険を知らせる音の統一基準を作ることは、多くの人にとって、日常生活をより安全なものにし、「命を守る」ことに繋がると期待する。

### ② “情報のユニバーサルデザイン” について

◇国民生活センター理事長 松本恒夫氏の助言

「助けを知らせる音の標準化」というだけでなく、標準化』というだけでなく、障がい者等も含めた、もっと大きなくくりで行った方がいい。

◇早瀬憲太郎氏：聴覚障がい者・ろう児の為の国語教育を实践（2017年八王子市職員研修）

子どもの安全からみても防犯ブザー等の助けを知らせる音の標準化は賛成。音は聞こえないので、振動や光の点滅（赤がいい）があれば尚いい。（自分達もいつも助けられるばかりでなく）助けを求める人がいれば助けられる。東日本大震災の時に、聴覚障がい者が、近くにいつ被災者から助けを求められても聞こえないので、気が付かず、非難されることがあった。そんな時にも、光の点滅等があれば分り易く助けられる。

◇早瀬憲太郎氏、早瀬久美氏：ろう者として日本で初めての薬剤師（2018年1月20日講演「障がい者だけでなくみんなが便利なユニバーサルデザイン（UD）」）

防犯ブザーは振動や光を付ければ、聴覚障がい者の不便解消（音が聞こえず情報が分からない）につながる。

### 考察：情報のユニバーサルデザイン

みんなに危険情報を知らせる（または受ける）事に貢献できます。更に、それを交番や家族、地域コミュニティーに通報する通信サービスができれば効果的。

### ③防犯ブザーの標準化についての意見収集

2017年11月昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科授業に於いて

#### ◇音の統一の必要性

・防犯ブザーも様々な音があり、聞こえてきた音が助けを求めている音なのか疑問を持つ可能性があり、標準化に賛成する。

・様々な防犯ブザーの音を実際に聞き比べて、「これが防犯ブザーの音だ」と決まっていた方が、危険や助けを求めているということが分かり易い。統一した音ができればいい。

#### ◇“助けに行く”、“危機が分かる”という視点からみた意見

・助ける側にとって、「誰もが分かるもの」が決められていると手を差し伸べやすいし、注意がむくので大切。標準化という言葉は大事なワードだと思った。

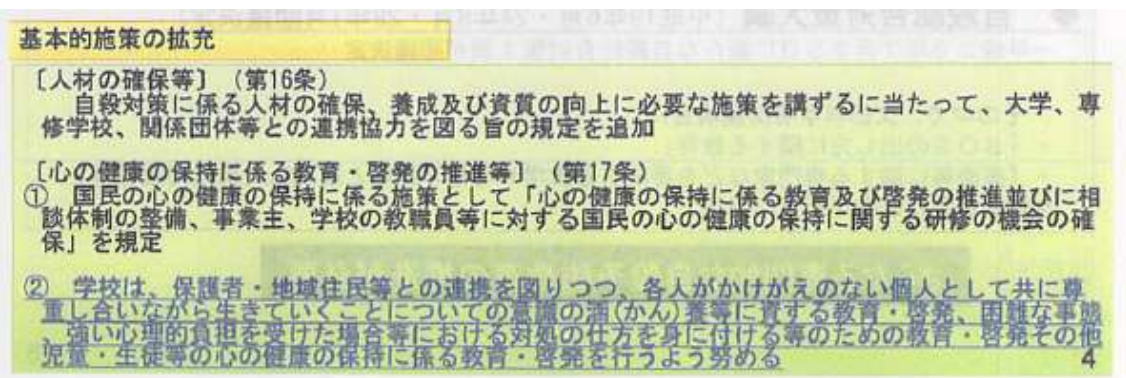
・様々な統一性のないオリジナルな音をだす個々のブザーを子ども達が鳴らしても、本当に周りの大人が危険に気づくことができるか疑問。早く、地震の警報のように、誰が聞いても分かる、危機感を感じる音ができればいいと思う。

#### ◇その他の意見

・今のアルバイト先では支給され、毎回持参して帰宅している。

### ③自殺対策基本法の一部を改正する法律（概要）第34回全国青少年相談研究集会（2018年1月18日）

#### ◇基本的施策の拡充〔心の健康の保持にかかる教育・啓発の推進等〕（第17条）



各人がかけがえのない個人として共に尊重し合いながら生きていくことについての意識の涵養等に資する教育・啓発、困難な事態、強い心理的負担を受けた場合における対処の仕方を身に付ける等のための教育・啓発その他児童・生徒の心の健康の保持にかかる教育・啓発を行うよう努める。とは、SOSの出し方に関する教育である。

SOSを出す相手は、保護者・担任・養護教諭・友達・スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカー・地域・児童相談所などである。（文部科学省初等中等教育局児

童生徒課生徒指導室長 松林高樹氏)

◇「子供に伝えたい自殺予防～学校における自殺予防教育導入の手引 Q&A」文部科学省  
児童生徒の自殺予防に関する調査研究協力者会議平成26年7月

### 考察：SOS の出し方に関する教育

自死の予防の初期の SOS の出し方において、防犯ブザーや危険を知らせる音の標準化も効果的であると思われる。

### 2. 関係機関との連携の現状

経済産業省産業技術環境局国際標準課から、助けや危険を求める音の標準化できる可能性があるので、事務局を探すよう言われ、規格協会に打診中であるが、キッズデザイン協議会にも、協力を要請したい。

### 3. 意見交換

杉山氏：防犯ブザーの音の標準化について消費者からニーズがあることを伝えて、日本電池工業会に事務局を打診してはいかがか。日本電池工業会が難しい場合は家電協会に打診してみてもいかがか。まず事務局となる協会を決定し、協会を通して音を決めてもらうという順番で進めると良いと思う。

田近：音のデザインというと、どこまで広げるかが悩ましい・埼玉県のアプリは危険を知らせる音・ライト・赤色点滅が搭載されている。埼玉県の音は事業者に候補音を提示させて、その中から決定した。

船田氏：標準化するためのコンセンサスをどこがとり、啓発するかということである。防犯ブザーを決めたのが、電池工業会であるから、JIS 化も電池工業会に事務局になってもらうのが良いと思う。ボタン電池のパッケージの安全基準（JIS ではないが）は電池工業会と東京都が行った。

いきなり全てのツールの標準化は難しいと思う。まずは、防犯ブザーの音の JIS 化を電池工業会の規格と一緒に目指す方がよいのではないか。

杉山氏：「業界団体を決めて作るか、強制法規でつくるか」のどちらかだろう。

田近：電池工業会に再プッシュするが、リーダーカンパニーを紹介してほしい。

杉山氏：全国防犯協会やPTA 連合会にも声をかけてから、電池工業会に依頼すると良いだろう。まず音を決めて、子どもに危険を知らせる方法を教えるのは警察に学校に入って教えてもらうとよいだろう。

森口：危険を知らせる音は、防犯ブザーや火災報知器があるが、行政の縦割りで統一されていないと思う。キッズデザインのような協会に子どもの安全のイニシアチブをとっていただきたい。

田近：キッズデザインは公平公正である。

杉山氏：情報のユニバーサルデザインは、すべきだと思うし、やったほうが良いと思う。

森口：日本には「子どもの安全基本法」なるものは無いが、海外にこのような法律があるだろうか？ご教示いただきたい。

船田氏：アメリカの州法には13歳以下の子どもを、家に一人にしてはならないとするものや、子どもを叩くの見たら通報することを定めたものや、娘と風呂に入ることやセクハラであるとするものがある。

杉山氏：当協会もJISの事務局を務めたばかりで憔悴している。事務局としての協力は難しい。

田近：8050と8150の違いは、どのようなことか？

船田氏：JIS 8150はキッズデザインの規格である。2010年頃から当協会が事務局となって、策定した。JIS L 8050は子どもの特性と危険源について言葉を規定した規格である。これに対しJIS 8150は、8050を踏まえたものづくりの手順を定めている。企業が製品を作る場合は、子どもの事故情報を調べた上で、子どもの事故防止対策を講じた製品を作るように定めている。

杉山氏：どうやって子ども服のヒモのJISを作ることができたのか？

田近：経緯を説明

田近：防犯ブザーは、子どもの安全の観点のみならず、障がい者や、高齢者等広い世代のSOSの出し方に使われている。全国の小学1年生に配布している。

浅見：防犯ブザーは、5年ごとに実施される国政調査員にも、毎回配布されている。

田近：しかし、電池工業会のマークの防犯ブザーではなく、安い防犯ブザー大半である。

船田氏：全体を一緒にすると、動かない。どこから始めるかだ。

田近：ブザー音は、音符にもできる。

杉山氏：音符に出来ても、音色まで定めるのは難しいのではないか。

船田氏：PTAなどを絡めて、働きかけると良いのでは。

まず、防犯ブザーの標準化に限る。先に音を作る→防犯ブザーをつくる→マスコミに働きかける→国が動く

マーケットとしては面白いが、広げ過ぎるとまとまらないだろう。

今、不便があるので、標準化してほしいという説明がないと、企業は標準化できないと思う。

「いろんな音があることで、危険が伝わらない。」ということ、消費者の声としてまとめてみては如何か？

田近：マスコミはどんなところが良いか？

杉山氏：フジサンケイビジネスアイ（旧日刊工業新聞）

船田氏：ブザーは、言葉と音を両方鳴らす方法もあるが、先に音を作っては如何か？

田近：貴協会の企業で、危険を知らせる音に協力していただけそうな企業があればぜひご紹介いただきたい。

杉山氏：防犯ブザーに協力してくれそうな企業がないか、心にとめておき、そのような企業とあった場合はそちらにふる。

以上